◉韓国政府は15名の留学生らを全員即時釈放せよ！
◉日本政府は15名の留学生らの人権回復に努力せよ！

11.22通信

1980年 2月14日
第21号
1部100円＋カンパ
年6回発行
振替口座
大阪4649・摂津富田教会

発行所
「11・22在日韓国人留学生・青年不当逮捕者を救援する会」
大阪府高槻市富田町3－7－25
摂津富田教会（〒569）
電話 0726－96－2562

李元二氏 金東輝氏 釈放！

12・23 弾みつけ一回の闘争を

昨年十二月二十三日、韓国法務部は恒例恩赦に伴う特赦により、「11・22事件」の李元二氏（27）＝京都市、徴役五年＝と金東輝氏（26）＝大阪市、徴役四年＝を仮釈放した。また、「康宗憲事件」の徐光兌氏（29）＝ソウル市、徴役八年＝も本国関連者として初の仮釈放をかちとった。昨年の光復節以来、在日韓国人「政治犯」への一連の釈放、減刑には、四年余りのわれわれの救援運動が大きく寄与していることはいうまでもない。しかし、これらの成果に有頂天となり希望的観測に基づく安易な楽観論は、「政治犯」救援に極めて重大な事態を引き起すことを肝に銘じる必要がある。闘いは決して終楽章を迎えたわけではない。白玉光氏をはじめとする五氏は依然として処刑の危機にさらされており、また最近各矯導所で有期刑者への転向強要がきわめて現状を瞬時も忘れてはならない。

「政治犯」家族国連派遣の大成功により切って落とされた一九八〇年の幕開けは、救援運動の一大飛躍の転換点となることは必定である。いま韓国はどこ数年来最大の寒波で凍えきっているという。その獄窓で春の到来を待ち望むわれわれの友人を思うとき、一瞬の遅滞も許されない。あらん限りの力を傾け共に救援の炎を燃やし続けよう！

十二月二十三日、李元二氏のオモニと金東輝氏の両親は、早朝の厳しい冷え込みの中、大田矯導所の入口で二人の子息を今か今かと待ちわびた。出所手続きに手間取ったが、午前十時過ぎ二人は硬ばった表情で現れた。しかし、出迎えの家族を認めると急に相好を崩し、涙の視線が幾度も繰り返された。

李元二氏は、事前に私服の差し入れができずボロボロの服で現れ、オモニを驚かせたが、「儀だけが復し、現在李氏は大邱の瑞緑宅に、金氏は両親が借りたソウルの自宅で各々待機し、日本への入国手続きを進めている。早ければ三月中にも戻る予定で、その際入国資格は、昨年暮帰国した八氏と同様「特別在留許可」一年となる見込み。

◇ ◇

李元二、金東輝両氏の仮釈放の報を受けて、「11・22救援会」では十二日午後、大阪北区の国労会館で記者会見を持ち、「遅きに失したが二人の釈放を歓迎する。一日も早く両氏が無条件再入国を果たすよう、日本政府に働きかけたい」との声明文を発表した。

康宗憲氏に復学手続き？

緊急措置令解除に伴い、韓国でソウル大学の学務当局は、同大学出身者で〝政治事件〟等で除籍された元学生の復学を認める名簿を公表したが、その中に医学部の康宗憲氏と先頃釈放された徐光兌氏の名前があった。

ソウル大のこの措置に対して、獄中の康氏がリストに入ったのは憲氏を救う会」では、彼の減刑が単なる事務上のミスでは、と指摘するむきが多い。しかし、「康宗憲氏の復学手続きがとられていることが判り、日本の救援関係者を当惑させている。

一月二十七日の韓国の新聞東亜日報が報道したところによると、ソウル大学の学務当局は、同大学出身者で〝政治事件〟等で除籍された元学生の復学を認める名簿を公表したが、その中に医学部の康宗憲氏と先頃釈放された徐光兌氏の名前があった。

ソウル大のこの措置に対して、釈放の前触れでは、と期待している。

4・6救援大バザー

■ とき　4月6日（日）午前10時～
■ ところ　PLP会館（環状線天満駅下車）

第1回救援大バザー（79年4月30日）

物品提供を！

＝仮釈放＝ 徐光兌氏も釈放！

拷問に耐え馬山から出所

ソウル消息筋によると、「康宗憲事件」に連座、徐役八年の刑を受けた徐光兌氏＝ソウル大医学部＝も、去る十二月二十三日、刑期を四年余り残し馬山矯導所から出所したことが明らかになった。

徐氏は、CIC（陸軍保安司令部）で韓国の歴史上未曾有の苛酷な拷問を受け、母親の崔末順さんの悲痛な訴えが内外に大きな衝撃を与え、その動静がつとに注目されていた。

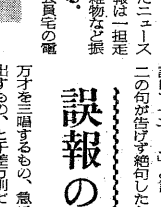
釈放後、徐氏はソウルに戻りかねてよりの許婚者と、一月には結婚式をあげ、また復学の準備も進めている。そのかたわら各界を訪ね、在日韓国人政治犯問題を踏んで訴えているという。

「11・22救援会」では、康氏との関連もありこれまで十数回の差入れを行うなど、徐氏の動向には大きな関心を持ち続けてきたため、今回の釈放を素直に評価して、今後の救援に万全を期すべく、国全南道の馬山市出身。幼少の頃より秀才の誉れ高く、七一年ソウル大医学部に入学。在学中はソウルのスラム街で求ランティア活動に従事していた。七五年、康宗憲氏らと共に逮捕され言語に絶する凄絶な拷問を受け、一時は精神錯乱を起こした、と伝えられている。裁判でも一貫して無実を主張したが、認められず七七年三月判決が確定、光州矯導所に下獄した。七九年六月同所で処遇改善を叫び、在日政治犯の柳兄弟らとハンストに参加したが、その報復として大田矯導所に再移監された。また、昨秋頃に馬山矯導所に三回目の移監をされた。

◇ ◇

徐光兌（29）＝ソ・ガンテ＝韓

誤報の重さと罪


白玉光氏

暮れも押し迫った十二月二十六日深夜、突然仰天するような一報がソウル電が入ってきた。「白玉光氏が死刑から無期に、徐勝氏が無期から十五年に減刑された」というのだ。

〝未確認〟と断ったニュースだが、これほどの情報は一担走り出したら余計な交錯物など振り捨てるのが常である。

救援会の主だった会員宅の電話は、相互連絡と翌日の対策の打ち合わせで一晩中鳴り響き、ウチ電で叩き起こされた関係者も少なくない。その一報を伝えた時の反応がふるっている。電話口で「エッ！」と言ったきりの句が続けず絶句したもの、見の間際になっても、判然とした「確認」がとれず、詰めかけた記者団に声明文を配りながら、「流すのは今しばらく見合わせてほしい」と、しどろもどろ。

二十八日になって、ようやく真相が判明した。「二人の減刑は、金芝河氏とともに法務部で決裁されていたが、全斗煥陸軍保安司令部長官らの12・12クーデターにより葬り去られたらしい」というものであった。

この四十十時間の迷走譚から、二人の減刑を考慮せざるをえないほど当局を追い詰めた〝政治犯〟の象徴的存在である二人が減刑されたというのだから、その喜びもひとしおであった。

しかし、だ、彼終は予想以上に早く訪れた。

翌二十七日午後三時の記者会見の席上、在日韓国人「政治犯」の象徴的存在である二人が減刑されたというのだから、その喜びもひとしおであった。

だ。なにしろ、在日韓国人「政治犯」の象徴的存在である二人が減刑されたというのだから、その喜びもひとしおであった。

康宗憲 ″険しくも、80年は我々の未来だ！″

康宗憲氏

〝お元気ですか。冬至も過ぎけっこう寒くなりました。段々と寒くなっていくのを見ながら、この手の底りの何日間かを送ろうとしています。

十二月分のお母さんの手紙を受け取りました。私は健康な体で修養生活を継続していますのでどうぞご安心ください。十一月二八日の集会（注）には友らが多数参加されたとのこと本当にうれしい消息でした。今年をこのように無事に終えられたのもすべて友らの暖かい声援があったからです。今日このように元気でいるのも友らの暖かい友情のおかげです。

七九年度をまたもや希望的消息に接することなくこの年を送らねばならなくなりました。我々の歩む道は険しくもまた長いのです。

ですがけっして失望はやめましょう。この頃、私はこう考えています。天地創造以来自然を改造し社会を改革してきた人類の歴史で、歴史が逆転したことはないということです。新約聖書ブル書十章九節に「その後なるものを立てんためにその先なるものを除けり」という話があります。過ぎゆく過去は新しい未来のために準備され、すべての事物には常に前向きの発展と志向があるものです。

七九年度においても我々はけっして後退しませんでした。

困難なで歩ですが我々は明らかに希望ある明日に向って一歩一歩と歩んでいます。八〇年代に向かう次の一歩も私は家族と親友諸君といっしょに踏み出して行きたいと思います。努力を惜しまなかった我々に希望に満ちた未来が訪れることを信じて疑いません。

多忙な年末（年始）父母と弟達、親友達とその家庭に幸福と平和が満つるよう心をこめてお祈り致します。親友達に私の新年の挨拶と感謝の意を必ず伝えてください。では お元気で。

一九七九年・十二・二四
クリスマス・イブに
宗憲拝

（注、康氏救援の映画「手を握り合える日よ再び」大阪上映集会のこと）

断鎖

政治犯家族の国連派遣は世界を地で大きな反響を呼び起こしている。ところが代表団の報告書を読んでいると、むかつ度の六つ箇所が出てきた。米国の国務省韓国部の係官は非常に高圧的な態度で「緊急措置令が撤廃されたら、韓国には政治犯はいま存在しない。あなた方は政治犯という言葉を使わない方がよい」と家族に言い放ったそうだ★同じような話をもう一つ。思、知人のインドネシア人記者がソウルで法務長官と会見した。長官は「おお国は政治犯が多くて大変ですね。わが国はたかだか百人ほどですよ！」とこれまた臆面なく語ったそうだ。日本もエラそうなことはいえない。アムネスティーの二百人説を童々と自書に引用している自称韓国通の評論家がわんさといる★どうして反共法・国家安全法容認者は政治犯にならないのか／韓国政府は彼らを〝思想犯〟と呼ぶ。では思想ゆえに獄中の奥深く幽閉されている者を政治犯と呼ばずして何と呼ぶのか／★二十人を下ることはあるまい、というのがソウル消息筋の観測だ。事実、各矯導所に夥しい数の思想犯が在監していた、と元政治犯らは証言している★彼らの存在は韓国内にあってはタブーである。親兄弟、友人さえも近寄らないという。寄れば累が及ぶからだ。そのため牢屋の彼らは困窮をきわめ悲惨の一語につきる。かって、救援会員が留学生らに差し入れようとしたところ、担当官が「在日の学生は恵まれている。一組の下着で何年も過ごしている思想犯の方に差し入れて欲しい」と逆に要請されたそうだ★またこれら政治犯の殆どは拷問によるいわれなきデッチ上げの可能性が強い。人革党事件や在日韓国人政治犯事件の荒唐無稽ぶりはより一層彼らの無実を物証している★地獄に等しい状況下で日夜痛苦に耐える彼らを〝忘却の政治犯〟としてはならない。アメリカも韓国もアムネスティーも頼りにならないのなら、われわれだけでもその声なき声を受け止めようではないか。韓国の真の民主化は、彼らの存在を抜きにしては語れない、と信ずるからだ。

1.7～1.31 国際世論を巻き起こす！

国連派遣家族代表団、奮闘する

一昨年来、救援会の総力をあげて取り組まれた在日韓国人「政治犯」家族の国連派遣行動は、このほど大成功を収め、前年に引き続き一九八〇年の救援運動も初頭より大きく前進した。

李佐永氏（家族協議会会長）を団長として、韓木利さん（獄脳の会会長）ら「政治犯」家族七氏と吉松繁氏（全国会議事務局長）で構成された代表団は、二十四日間の〝世界救援行脚〟を終え、多大な成果を土産に、去る一月三十一日無事帰着した。

代表団の救援行脚の概要は次の通り。

アメリカ　一月七日夜～十六日。

一月七日夜、ニューヨークのケネディ空港に到着。

翌八日（現地時間）より精力的な行動を展開した。

まず国連人権委員会を訪れ、事務局のパパデマス氏と懇談し、①五氏の死刑執行阻止、②徐俊植氏の永久投獄阻止、③獄中の非人道的処遇の中止、④韓国への調査団派遣、等を訴えた。

これに対し同氏は、死刑囚の生命保全について、国連事務総長を通じ日韓両政府に働きかけることを約束し、人権委にこの問題が〝提訴〟されたなら、その人権侵害を是正するため、調査団派遣、等の措置がとれることを示唆した。

そこで代表団は、〝提訴〟を具体化させるため、急拠予定を変更し翌九日から十五日にかけて、人権委加盟のカナダ、西独、ユーゴ、ザンビアなど八カ国の代表部を訪問し、〝提訴〟の際の助力を要請した。

十五日は再びニューヨークに戻り、国連本部内の日本人記者クラブで記者会見を行った。

ジュネーブ　一月十七日～二十三日

国連人権部のファン・ボーベン部長と会い、四十万の署名の写しを提出して「政治犯」の人権救済を訴えた。同部長は韓国への働きかけと、二月四日より開かれる人権委に取り上げることも検討すると答えた。

その他、代表団は、ジュネーブ世界キリスト教協議会、国際法律家委員会、国連難民高等弁務官事務所を回り、訴えを行った。

ローマ　一月二十四日～二十七日

東京の米大使館に在日韓国大使館の一等書記官から電話があり、「彼らは北朝鮮の宣伝をするから」カトリック正義と平和委員会をたずねたところ、同委員会代表団の訴えに真剣に耳を傾け、「教皇庁を通じて必ず法王へ伝える」と答えた。また、代表団は近く来日が予定されているパウロ二世法王と謁見を希望する陳情書を提出した。

ロンドン　一月二十七日～三〇日

アムネスティー本部を訪問。アムネスティーは、とりわけ徐俊植氏の問題に積極的な反応を示し、「来る二月二十七日の更新を阻止するため、韓国政府に働きかける」と強く言明した。

帰日後の家族代表団はいずれも疲労気味だが、充分な手応えがあったと、意を強くしている。なお報告集会は、大阪では一月十五日午後六時から国労会館で、また東京では二十六日山の手教会で各々開かれる予定。

国連派遣団の歓送風景、成田空港にて。（1月7日）

家族代表団のアメリカ入国

韓国政府妨害策す

▼怒りの声高まる▲

政治犯家族の国連訪問は、韓国政府の旅券が発給されないため、日本赤十字社の身分証明書が代用されるという異例の海外渡航となったが、さらに代表団の渡航に、韓国政府が種々の妨害工作を企てていたことが判り、この行動に対する当局の困惑と苛立ちぶりがうかがえると関係者は注目している。

「アメリカに入国させないでほしい」とデタラメな要請があったそうだ。

またアメリカ国務省にも韓国外務省の課長から電話で同じような虚偽の事実を吹聴し、入国拒否を迫ったという。またこの課長は「アメリカに行っても韓国には来ない。北朝鮮の代表でないなら韓国に来るべきだ」と事実関係に疎い米国の役人の判断を、故意に自分たちに都合よくするための暴言を吐いた。

なぜなら、韓国政府は代表団の政治犯家族に従来から韓国人国籍をおろかパスポートの発給すら拒否し、モチ寄せた。結局、成田出発間際にしたり意識的に引き延ばしてきたのの一月七日午前九時に待望のビザが発給されたわけだが、これらはたのか、米国側も当初短時日で出からだ。この電話作戦が功を奏し方針であったビザ発給に急に慎重になり、代表団を最後までヤキ会、家族の間で怒りの声があがっていた。

◇　◇

救援カンパを

在日韓国人「政治犯」救援運動は、昨年の前進にさらに弾みをつけるように、本年も初頭から胎動者いものがあります。

獄獄で後援の苦しみをなめる践された友人たちを救うため、さらなるご支援を引き続きお願いするものです。

さて、救援会の財政は、先頃渡韓団を編成したためひっ迫致しております。いま一度無理を承知でカンパをお願いします。

（送り先等、郵便振替、大阪4649、摂津富田教会）

救援

大田レポート

李東石氏存分に語る

―処遇、転向、信念―

李東石氏

去る一月十五日、「李東石さんを救援する会」のメンバーはオモニ（母親）と共に渡韓、大田矯導所で李東石氏（28）＝東大阪市、懲役五年＝との約一時間の特別面会に立ち会うことができた。

面会に際しては、社会情勢に触れないこと、本人に転向を勧めるという二点が付帯条件となった。

またこの交渉の折、担当官は「人権、人道といわれても、何もしていない人間を捕らえてそのまま出すことは、韓国にとってそメンツもあり、死活の問題だ」と注目すべき発言を行った。

「健康状態は良好だ。目も曇もない。正月はずっとにとって良くなかったし、風邪もひいていない。この期間は面会、通信、差し入れが禁止されるから。本当の正に韓国のものも見せてくれる。処遇は少しずつ良くなっているみたいだ。

「絵葉書は入らない。たまに一枚か二枚入ることがあるが、その時は何十枚の中の一枚だと思い、非常に嬉しい。」（※この面会後

髪の毛が薄くなってきたが、まだ一度も医師の世話になったことは ない。運動は一日一時間、一周十五メートル位の所を一人で走った り、壁に向ってテニスのまねごとをしている。毎朝乾布まさつを励行し、体重が増えているほどだ。

「食事は、主食が米、麦、豆が2…4…4のもので、量はひと握り位のため全く不足している。そのため雑穀金で「リンゴ、ブドウ、卵 を常時買っている。そういえば去年の夏、社会見学で外に出た時、食堂で久しぶりに肉を食べた。油 だけれども、九時の消灯まで本を 読んだりしている」。

「刑務所の生活は単調だが、少 しは気晴らしもある。この前、ソ ウルから大学教師が来て講演会が あった。この時は、在日韓国人だ ったので、身体が受けつけてくれ ず気分が悪かった。今年の正月に はトック（朝鮮風雑煮）を食べ

「ソウルの法廷に行く時、同じ 位の年の人が同席の担当官に頼んだ ので、日用品が買えた。日 用品は、ノート、ボールペン、 鉛筆、ハブラシ、歯磨粉、 石鹸、手拭、下着、靴下、 ズボン、上着、ジャンパー、 帽子、ビニール袋、ビニール 傘、ビニール靴、ゴム長靴、 ゴム手袋、ゴム前掛、ゴム 長靴、ゴム手袋、ゴム前掛、 ゴム長靴、ゴム手袋、ゴム 前掛、ゴム長靴、ゴム手袋、 ゴム前掛、ゴム長靴、ゴム 手袋、ゴム前掛